



Title	Edward Albee and Biopolitics: Exploring Body, Mind, and the Limits of Language
Author(s)	西村, 瑠里子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/101737">https://hdl.handle.net/11094/101737</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名（西村 瑠 里 子）	
論文題名	Edward Albee and Biopolitics: Exploring Body, Mind, and the Limits of Language (エドワード・オールビーとバイオポリティクス——身体、意識、言語表現の限界)
<p>論文内容の要旨</p> <p>エドワード・オールビーはコミュニケーション、家族像、高齢化、セクシュアリティといった社会規範と、その逸脱を巡る登場人物の葛藤を通して、アメリカ社会の不寛容を描いてきた。彼の作品は観客にこれらの問題を再考する場を提供するが、作劇法と政治的コミットメントの関係については十分に論じられてこなかった。しかし、特に後期作品では、能動的解釈を促す観客への働きかけによって政治的メッセージや社会問題へのコミットメントが強化されている。本博士論文は、オールビー劇の政治性をテーマと演劇空間・観劇経験といった構造という二つの側面から探求する。テーマの政治性の考察においてはバイオポリティクスの視座を用い、精神的・身体的に展開される生への干渉、統制、矯正といった規範化のメカニズムと、それに抗う個人の姿を分析する。これはミシェル・フーコーの指摘する、生への継続的な矯正と抵抗の過程とも共通項を持つ。さらに政治性はテキストだけでなく劇構造にも現れる。初期作では登場人物は問題を放置するが、中期作では登場人物が苦悩を経験する姿を通じて観客が客観的理解を得る。後期作では、観客自身が苦悩を迫体験し、内省を促される構造へと変化する。このように、オールビーは観客に規範を問い直させ、共感や葛藤を生み出す。本論文では、『動物園物語』、『アメリカの夢』、『ヴァージニア・ウルフなんて怖くない』、『三人の背の高い女』、『山羊——シルヴィアってだれ?』の五作品を分析し、オールビーの政治性を明らかにする。</p> <p>第一章では『動物園物語』を分析し、バイオポリティクスによって「正常」とされる規範が、適応できない人々を自己疎外へと追いやる現実を明らかにした。ジェリーの死とピーターの無力感、コミュニティの異常性と、排除を恐れるがゆえに問題を放置する不毛性を示している。さらに、『アメリカの夢』におけるグランマやヤング・マンに接続される、オールビーが問題を提起しながらも、理解は観客に委ねる初期作品の特徴を指摘する。</p> <p>第二章では『アメリカの夢』を物質主義や史的唯物論の観点から分析し、倫理の欠如が生みの価値の引き下げや空虚化を生み出す構造を明らかにする。グランマは問題を認識しながらも解決に関与せず、代わって感情を失ったヤング・マンが商品として家族に受け入れられることで、人間の価値が外見や機能に還元される社会が浮き彫りにされる。また劇作術の面では、異化効果やシニカルな笑いが観客の批判的理解を促す役割についても検討する。</p> <p>第三章では『ヴァージニア・ウルフなんて怖くない』を優生学や順応主義の観点から分析し、オールビーの初期作から後期作への変化を考察する。ニックが象徴する生物学的優位性と学長の権力構造の共犯関係を通じて、管理社会が個人の生を物象化する仕組みを指摘する。またジョージとマーサが苦悩のあまり幻の息子を創り出し、それを維持してきた過程を分析し、理想の家族像が個人を拘束する構造と、その解体の可能性を明らかにする。</p> <p>第四章では『三人の背の高い女』を分析し、オールビーの後期作品における観客の能動的な関与の重要性を考察する。本作は、エイジズムや医療・介護制度が老いの矜持を奪う矛盾を描き、Aの不可逆的な喪失と医療拒否を通じて老いが第三者にどう映るかを示す。表現主義的な第二幕では、Aの拒絶が一貫した矜持の表れであることが明らかになる。さらに第二幕は記憶や経験を通じたAの現在の自己を理解するプロセスでもあり、さらには観客に老いをありのままに受け入れる寛容さ——やさしさを経験させる場としても機能していることを指摘する。</p> <p>第五章では『山羊——シルヴィアってだれ?』を分析し、多様性を標榜するアメリカ社会における不寛容の実態を明らかにする。本作は、禁忌的行為に対する登場人物の反応を通じて、単純な二項対立では捉えきれない差別の構造や、異常を例外として包含し、かえって異常性を強調する矛盾を描く。さらに観客の価値観と重なるロスの視点を通じて、寛容の限界を観客自身にも突きつけ、オールビー作品の政治的問題意識を浮き彫りにする。</p> <p>論文全体の結論では、オールビー劇の政治性をバイオポリティクスというテーマと作劇法の変遷という二つの観点から再確認する。オールビー劇の政治性は特定の主張を押し付けるのではなく、観客自身が解釈する中で浮かび上がる、演劇というメディアの特質を活かしたものである。言語化を超えた体験を通じて観客の思考を促すことこそが、オールビー劇の政治性を読み解く鍵となる。</p>	

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 西 村 瑠 里 子 )			
論文審査担当者	(職) 氏 名		
	主 査	准教授	岡本 太助
	副 査	教授	中村 未樹
	副 査	教授	畑田 美緒
	副 査	准教授	岡本 淳子
	副 査	准教授	北岡 志織

## 論文審査の結果の要旨

本論文、"Edward Albee and Biopolitics: Exploring Body, Mind, and the Limits of Language"（「エドワード・オールビーとバイオポリティクス——身体、意識、言語表現の限界」）は、現代アメリカ演劇を代表する劇作家エドワード・オールビー（Edward Albee）の初期・中期・後期それぞれから厳選した主要作品を対象に、ミシェル・フーコーやジョルジョ・アガンベンが提唱したバイオポリティクス（biopolitics）の概念を援用しながら、作家と作品に秘められた政治性およびその表現手段としての劇作法の変遷をたどり、従来の研究では十分に検証されてこなかったエドワード・オールビーの政治性を、作家・作品研究を推進するうえでの重要なテーマとして再定位する試みである。バイオポリティクスの視点を導入することにより、まずアメリカ合衆国においては社会規範が身体と精神の両面において個人の「生」のあり方に干渉し、それを統制あるいは矯正するものであること、さらにそれが時代とともに変化しつつも、冷戦期から現代にいたるまで持続していることが明らかにされる。またオールビー劇はそうした規範の圧力に逆らいそこから逸脱するような「生」のあり方を描く点に特徴があると措定し、キャラクター造形や観客への働きかけを含めた劇作法の変遷をたどることで、逸脱的な「生」に対するアメリカ社会のまなざしの変化が浮き彫りとなるのみならず、オールビー自身がそうした変化を鋭敏に捉えながら劇作を行う作家であったことも明らかにされる。より具体的にいえば、初期作品の登場人物は、規範による抑圧を問題として認識しつつもそれを積極的に解決しようとせず、むしろ無関心を装っている。中期では登場人物がその問題を自分自身のこととして受け入れ苦悩し、観客にもその苦悩を理解するよう促すようになり、後期にいたっては観客が単なる理解の域を超えて、登場人物の苦悩を追体験するような劇構造が導入されることとなる。言語による他者理解の困難からはじまり非言語的共感へといたるオールビーの劇作の変遷に、アメリカ社会が内包する不寛容の問題への観客の自省を促す道を模索する劇作家の姿を読み取り、単なる芸術論にとどまらないエドワード・オールビーの政治学とでも呼ぶべきものを提示してみせたことには、作家研究ならびにアメリカ演劇研究全体にとっても非常に有意義でありかつ高い学術的価値があるといえる。

論文全体は序論と結論を除き 5 章で構成されており、一部例外があるが、概ね発表年の古いものから時系列に沿って議論が展開される。第 1 章"The Absurdity of Biopolitical Correction in *The Zoo Story* and *At Home at the Zoo*: Challenging the Possibility of Communication through Deviance and Harm"では、オールビーのデビュー作である『動物園物語』（*The Zoo Story*）を、バイオポリティクスによる個人の矯正のメカニズムという観点から分析するものである。議論を進めるにあたっては、アガンベンを参照し、「生」（life）を生命という現象の基

本的あり方を指すゾーエー (zoë) と社会的・政治的に意味付けが施された「生き方」を意味するビオス (bios) に分け、さらにそれらに厳密に分類されない中間的あるいは例外的な状態もあることを述べている。この理論的枠組みは以降の章においても採用されるため、第1章は論文全体のイントロダクションも兼ねているといえる。本作における動物園や檻の表象は「監獄としての社会」をメタフォリカルに映し出すものであり、社会から排除されることへの恐怖のあまり人々が表層的なコミュニケーションにとどまってしまう、それが結果としてバイオポリティクスの定める「正常」の枠組みを個々人に強制することになる様を描いている。およそ半世紀後に本作が第一幕を追加した*At Home at the Zoo*としてリメイクされた際には、上記のようなコミュニケーション不全を克服する可能性が強調されたとの主張がなされ、規範への同調圧力と社会における分断についてのオールビー自身の考えの変化がそこに表れていると結論づけている。

第2章"Ethical Devaluation and Commodification of Life in *The American Dream*: Exploring Alienation Effect and Cynical Laughter"では、同じく初期の作品である『アメリカの夢』 (*The American Dream*) を物質主義や史的唯物論の観点から分析し、人間の物象化やそれに伴う「生」の空虚化に対する批判的検討が行われる。理想的なアメリカの家庭が物質主義に汚染され、人間が購入し消費し、不要となれば廃棄される商品として扱われる様を戯画的に描く本作では、一部の登場人物がそうした物質主義の弊害を認識しつつもそこから目をそらしてしまうのだが、そうした無関心や逃避そのものが問題として提示されている。オールビーは演劇における異化効果やシニカルな笑いをを用いて、登場人物が感じる、見て見ぬふりをしている問題に直面せざるをえなくなる不安を、観客が感じる、劇を観ていて笑っていても大丈夫なのかという不安と重ね合わせることで、問題意識をいわば観客に託するという戦略をとる。本章では、観客の反応を含めたプロセスを演劇として構成する手法に、オールビーの政治性を見てとることができると結論づけている。この最後の指摘は後期作品についての議論でも繰り返されるものであり、観客による受容をどう方向づけるかという問題が、本論文を貫く論点であることが強調されている。

第3章"The Dynamics of Family Norms in American Society in *Who's Afraid of Virginia Woolf?*: Exorcising the Imaginary Son and Constructing New Relationships"は、オールビーの代表作である『ヴァージニア・ウルフなんて怖くない』 (*Who's Afraid of Virginia Woolf?*) における生物学、試験管ベビー、遺伝子操作への言及に着目し、冷戦期アメリカにおける「生」の物象化の問題に、優生思想や順応主義の文脈から再検討を加える。象牙の塔における政治力学に翻弄され、「生」の多様性や人間の個性を抹消するような生物学的思想のターゲットとなったジョージとマーサ夫妻は、理想的なアメリカの家族という規範に適合できない苦しみから逃れるために、架空の息子を作り出しその幻想の中に逃避してきた。本章では、劇の第三幕における悪霊祓いによって、理想の家族というものが社会的に構築され共有された幻想に過ぎないことを夫妻が認識する点に注目し、そうした共同幻想のゲームから脱落してしまう自分の弱さを夫妻が共有することで、社会規範とは外れた別の関係性が模索されるとの解釈を提示する。結論では、社会規範に迎合するかそこから逸脱するかの二者択一とは異なる、より自由な「生」の可能性を示している点が、中期オールビーにおける大きな変化であると述べられている。全体の中では、初期作品から後期作品への移行を論じるパートとなるが、章立てのバランスとしては、中期作品を扱う章がもう一つあってもよかったかもしれない。

第4章"Dignity of the Elderly and Ageism in *Three Tall Women*: Understanding Aging with Kindness"では、オールビー自身の母親をモデルとする高齢の女性Aと、50代の介護職員B、20代の法律事務所スタッフCのやり取りを表現主義的な手法で描く後期作『背の高い三人の女』 (*Three Tall Women*) における老いの問題が論じ

られる。本作では医療や介護という制度そのものがバイオポリティクスの装置として機能し、生存を可能としながらも個人の「生」の尊厳を奪い取るという矛盾をはらんでいることを指摘したうえで、第一幕においてはAによる介護の拒絶を他の登場人物がどう捉えているかが中心的に描かれ、いわば外部から見た老いの現実が示されていると述べる。しかし第二幕では一転してAの記憶や意識の流れが劇のアクションとして表出する手法が用いられており、ここではむしろ内側から見た老いの現実が描かれ、Aが記憶を頼りに現在の自己を理解しようと試みる様が前景化される。自分とは異なる他者を理解しようとする際に、観客が当事者の視点に立つことを促し、合理的判断を度外視した寛容の心あるいはやさしさをもって他者と接することの重要性を観客に体感させるというのが、後期オールビーにおける演劇戦略であるとの結論が示される。次の章では寛容の問題が論じられるが、本章ではそれをやさしさという言葉で言い換えていると思われる。しかしながら、やさしさという言葉は感覚的過ぎるため、結論部のインパクトが薄れてしまっている。作品分析を通して「やさしさ」を独自に定義し直すことで、改善が見込まれる。

第5章"The Paradox of Inclusion in *The Goat, or Who Is Sylvia?*: Examining Exclusion under the Guise of Acceptance"では、動物との性的関係という最大のタブーに挑戦した後期作品『山羊、あるいはシルヴィアってだれ?』（*The Goat, or Who Is Sylvia?*）を題材に、多様性を重んじるはずのアメリカ社会における寛容の限界に挑戦する作家の政治性が検証される。ここで問題とされるのは、異質性を社会における例外的なものとして許容する多様性重視の思想が、実のところその異質性を強調し差別を助長してしまうという矛盾である。これは、主人公の行動を理解しようとする周囲の人々の思いと本人が彼らにどう理解されたいと思っているのかがかみ合わず、異質な他者に寛容であろうとする姿勢そのものが無自覚な差別意識を露呈し、相手の異常性を際立たせてしまうという逆説の構造に外ならない。本作の特異性は、他者に寛容であると自認する者がその価値観を揺さぶられるという劇中のできごとが、それを観ている観客にまで拡張される点にあり、この劇に対する自身の反応を通して、観客は自らの寛容の限界に直面させられることになる。言語や論理を超えたところでのコミュニケーションや他者の理解がきわめて困難であり、時に重大な矛盾をはらむものであるという認識こそがオールビー演劇の政治意識の到達点であり、究極のところでは演劇という経験そのものとそこに関わる観客の倫理観や価値観そのものが批判的に問い直されることになるのである。

以上の議論をふまえ、結論では本論文の主たる論点が要約的に示される。現代アメリカにおいて様々な社会規範が心身両面において個々人の生に働きかけ影響を及ぼすことをバイオポリティクスの理論を手掛かりに例証しつつ、オールビー劇がそうした規範による束縛と格闘しがく人々をいかにして描いてきたのかを、作品分析を通じて論述するというのが、論文全体を貫く方法論である。登場人物の表層的な部分を描くのみで問題提起にとどまっていた初期作品から、登場人物の内面的な苦悩を掘り下げ観客による理解を促すようになる中期作品を経て、後期作品では、論理的思考を超えた感覚的・情緒的体験として観客に登場人物の苦悩を迫体験させるようになるという、オールビーの劇作法の変遷そのものから、彼の政治意識の変化と深化を読み取ることができるという仮説を証明するために、本論文ではあえて時系列に沿った作品分析という手法を用いている。つまり、オールビー劇とは作者の主張を観客に押しつけるものではなく、作品を能動的に解釈しそれに反応する観客の存在があってはじめて、その政治的意識が浮き彫りになるのである。それは演劇というメディアの特性を熟知したオールビーならではの演劇戦略であり、言語的コミュニケーションを超えた体験を共有する方法を徹底して探究する点に、オールビー劇の独自性があるとの結論が導かれる。

審査委員からは、文章の不要な繰り返しが目立つため、さらにすっきりさせて読みやすくすることができたのではないかと指摘がなされた。また議論の土台となる理論や概念——バイオポリティクス、政治性、観客論、不条理、異化効果、歴史など——が十分に説明あるいは定義されないままとなっている印象が残るとの意見が複数の委員より出された。これに関連し、作品そのものの分析と具体的な引用が少ないため、作品についての知識がなければ理解しにくい箇所が散見される一方、時代ごとの社会状況の変化についての考察は逆に作品から得られる情報に依拠しているため、歴史的背景についての一次資料なども精査すべきであったとの指摘もあった。これらに共通する問題は、論文全体を貫くテーマが見えにくい、あるいは先行研究との兼ね合いで本論文の新機軸がどこにあるのかが分かりにくいということであると考えられる。道具立ては派手なものの、導かれる結論はシンプルかつオーソドックスなものとなっているが、これは抽象的概念に作品を当てはめてそこから普遍的なメッセージを引き出そうとし過ぎたためであると思われる。本論文の面白さは、むしろ作品や作家ならではの特徴とその時代ごとの変遷を丁寧に跡づけるところにあるため、普遍性よりも個別性と歴史性をより前面に打ち出すべきであったかもしれない。特に観客論については、オールビーが判断を観客に委ねるという結論に終始している印象がぬぐえない。観客論や上演論は演劇研究にとっての躓きの石であり、客観的かつ論理的な分析が難しい領域である。本論文はその難しさとより真摯に向き合うべきであったが、裏を返せば、今回の論文によって今後の研究においてさらに追究してゆくべきテーマが明らかになったということもできる。

今後改善してゆくべき点が浮き彫りになったが、執筆者もそれらについて十分に自覚しており、今後の研究の具体的な計画も立てられている。英文の正確さと読みやすさ、論の運びの丁寧さ、オールビー研究において従来にはない新規性を打ち出そうという意欲の全ての点において、アメリカ演劇研究分野における今後のさらなる活躍が期待できる。また今回の口述試験および質疑応答を通して、自身の立論の美点と問題点を客観的に把握し、他者の意見にも真摯に耳を傾け議論を重ねてゆく姿勢および斬新な切り口を発見する能力の高さから、執筆者が有するアメリカ演劇研究者としての資質を窺うことができた。

上記考査に基づき、論文の内容、文章表現、研究上の意義等を総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論に達した。